

興味深いパトグラフィーのひとつとしてベートーヴェンの病歴も忘れてはならないだろう。ベートーヴェンの直接の死因は肝硬変であった。晩年には病変の苦痛を和らげるためにワインを多飲し、病状をますます悪化させている。

ベートーヴェンの容姿はおでこが突き出し、鼻根部が深く凹み、鼻はあぐらをかき、あばたの跡があり：と、お世辞にも美形とは言えなかったようである。あばたについては後天的に天然痘に疾患したと考えられるが、その他の所見は先天性梅毒特有のものであり、ベートーヴェンが生涯悩んだ難聴もそこに起因している、との見解も存在する。同様に完治することのなかった慢性の下痢は、どちらかというところ心身症のようなものだったらしい。

いずれも多少三面記事的要素を感じさせる内容だが、どうも妙に興味をくすぐられる話題である。

J・S・バッハ

一九八五年はヨハン・セバスティアン・バッハ（一六八五―一七五〇）の生誕三百年目の年として、ウィーンばかりでなく世界中の都市で、バッハにちなんだたくさんの催しが行なわれた。中でもバッハが生まれ生涯の活動の地であった東ドイツでは、大がかりなプロジェクトが組まれた。バッハと同じ年にはゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデル（一六八五―一七五九）やドメニコ・スカラッティ（一六八五―一七五七）も生まれており、そちらの作曲家達の記念祭的行事も行なわれたが、大バッハの前で影が少々薄くなってしまうのは、致し方ないようであった。

バッハというと「バロック時代の大作作曲家」という知識に始まり、「偉大」「完璧」などのイメージと共

に、「宗教音楽」というあたりからは多少の抹香臭さも想像されそうである。「宗教」となると今度は「敬虔」とか「清貧」といった単語が脳裏に浮かび、バッハとはその一生を神に捧げ、なかば修道士のように生きていた人物のように思われてくる。

ところが現実のバッハは、大変活力に溢れた、精力的な人間であった。現代に残されたバッハの数多くの手稿や手紙などの筆跡鑑定の結果でもその事実は明らかにされているが、バッハが彼の先妻マリア・バルバラと、彼女の死後再婚した後妻アンナ・マグダレーナから合計二十人もの子供をもうけた事だけを見ても、宗教即修道院的なイメージはふっとんでしまう。マリア・バルバラとの結婚当時バッハは二十二才、彼女との間に七人の子供が生まれた。その後二十才のアンナ・マグダレーナと再婚した時バッハ自身は三十六才、残り十三人のうち最後の子供は彼が五十才の時に生まれている。

バッハ一族の家系には優れた音楽家が輩出し、遺伝生理学の観点からも大変興味深い例として研究され、今日では学校の教科書にものっている程である。バッハの息子の中で音楽史上もその名が残っているヴィルヘルム・フリーデマン（一七一〇―一七八四）、カール・フィリップ・エマヌエル（一七一四―一七八八）やヨハン・クリストフ・フリードリッヒ（一七三二―一七九五）らの作品は今日でもしばしば演奏される。当時は今日の評価とは逆に、息子達の才能の方が世間で取り沙汰され、人気があったようだ。バッハが世を去った翌年、有名な作曲家ゲオルク・フィリップ・テレマン（一六八一―一七六七）も、バッハをして「より偉大な」息子カール・フィリップ・エマヌエルを育てあげた有能な父親として讃えている。

バッハの子供達の約半数は不幸にも若くして亡くなっているが、それでもバッハ宅は常時多数の家族を抱えた大所帯であった。この大家族を養い、子供達により良い教育の場を与えるために、バッハは次々に職場を変えている。ライプツィヒの合唱長としての職から、バッハは当時の大学教授の給料の約三倍に匹敵す

る七百ターラー程の年収を得ていたようだ。しかし大都市は物価も高く、生活は思った程楽ではなかった。常により良い条件の職場を捜していたが、その望みは結局かなえられない事なく、千七ターラーの遺産を残して世を去った。死因は脳卒中。晩年はほぼ失明の状態にあり、最後の作品である「フーガの技法」が未完のまま残されているのもこのためである。

それこそ千曲以上あるバッハの作品の中で一番の醍醐味は、「マタイ受難曲」などに代表される、歌のソロと混声合唱とオーケストラの合奏による一連の合唱曲であろう。単に聞き流しているだけでも圧倒されるが、事前に多少なりとも聖書を読んだり辞書などで歌詞の意味を把握してから観賞すると、ひとつひとつの言葉の重さや、そこに託された感情の深さがどのように音楽に変換されているかが良くわかり、感動を呼び起こされずにはいられない。

パイプオルガンの作品も「枚挙に暇なし」だが、その他にもヴァイオリン一挺で演奏される「シヤコンヌ」や、ピアノまたはチェンバロで演奏される「ゴールドベルク変奏曲」などは、バッハの芸術の頂点を極めているものである。

ベートーヴェン

ルードヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（一七七〇〜一八二七）が亡くなってからちょうど百六十年目に当る一九八七年の春——彼の命日は三月二十六日である——ウィーンの出版社（ヴィルヘルム・マウトリッヒ社）よりベートーヴェンの病跡について新しい本が出版された。ベートーヴェンの病跡については古くから数々の研究成果が発表されてきたが、資料不足、医学知識の不足、また多くの興味本意な憶測の影響など